アジアと日本

小林　道憲

アジアと日本

小林道憲

目　次

東アジア時代の検証
多様性の中の共存

東アジア時代の検証

東アジアの時代

『文明の転換と東アジア』（一九九二年・藤原書店刊）は、「トインビー市民の会」が主体となって、一九八九年から一九九一年にかけ、日本、韓国、中国で開催した「トインビー生誕一〇〇年・アジア国際フォーラム」で報告された東アジアを巡る有識者の論考と交流の報告である。ここでは、今日成立しつつある地球文明の中での東アジア諸国、特に日本、韓国、中国のいわゆる儒教文明圏の位置づけと、その果たすべき役割について、各国の研究者が各方面から報告し、東アジアの将来について真剣に討議している。

確かに、二十世紀末の世界史の現段階を眺めれば、今世紀の二度の大戦を経て、さらに第二次大戦後の米ソの冷戦の終結を迎えた現在、西欧文明および西欧文明が生み出した諸システムに翳りが見え、それに反比例するように、急激に東アジア諸国が興隆してきている。もしも、世界史に重心というものがあるとすれば、世界史の重心は、十九世紀のヨーロッパから、二十世紀のアメリカやソ連へ、さらに二十一世紀のアジアへと移動しつつあるように見える。その意味でも、現代は、大きな文明の転換期に面していると言える。とすれば、東アジア諸国がどのような仕方でこの地球文明の創造に参加するかは、二十一世紀に向けての世界史の運命の決定において、重要な役割を担っていると言わねばならない。吉澤五郎氏が「まえがき」の中で言っているように、西欧とアジアの逆転現象が様々の面で見られる今日、これまでの知的枠組みを越える創造が求められており、視点そのものの転換が要請されていると言えよう。

だが、この東アジアの時代はどのようにして成立してきたのであろうか。最近の東アジアの興隆は、主にその経済発展によって支えられている。この経済発展が物資の大量生産と大量消費のシステム作りであったとすれば、その源泉は、遠く十八世紀末のヨーロッパにおける産業革命にまで遡ることができる。

十八世紀後半から十九世紀にかけて、産業革命による工業社会の形成に成功したヨーロッパは、その経済力と、それに支えられた軍事力によって、ヨーロッパ外の世界にその勢力を拡大していった。この近代ヨーロッパ文明の世界化という現象を考慮せずして、現代の地球大的な産業技術文明の興隆は考えることができない。非ヨーロッパ世界は、ヨーロ

ッパ諸国によって植民地化された場合でも、されなかった場合でも、いずれにしても、ほとんど強制的に、この物質的に優位を誇るヨーロッパ近代文明を受容せざるをえなかったのである。西欧化あるいは近代化と言われる過程がそれであった。その限り、神川正彦氏が、論文「東アジアの文明論的パースペクティヴと日本」の中で明らかにしているように、十九・二十世紀は、ヨーロッパ近代文明が中心文明となった時代である。他の諸文明は、過去にいかに偉大な歴史をもっていようとも、ヨーロッパ近代文明の優位の前に、順次、周辺文明化されていったのである。周辺文明化された非ヨーロッパ諸文明は、中心文明としてのヨーロッパ近代文明からの文化変容の圧力を、外発的に、否応なく受けざるをえなかった。そして、諸文明は、それぞれの歴史的条件の下で、外来と土着、近代化と伝統の間の葛藤を演じながら、世界化したヨーロッパ近代文明の枠組みの中へと組み入れられていったのである。

ところが、二度の大戦後、特に二十世紀後半の世界史においては、様々の形でヨーロッパ近代文明を受容した非ヨーロッパ世界が、民族独立運動などを通して、権利主張をしだし、ヨーロッパは逆に植民地を失い、政治勢力としては急激に矮小化せざるをえなかった。今日の東アジアの抬頭も、この二十世紀後半の歴史を前提にしている。東アジアの昨今の隆盛をみると、今後は、もしかしたら、東アジアの方が中心文明となり、ヨーロッパの方が周辺文明化されるのではないかとさえ思われるほどである。

しかし、今日の東アジア諸国が推し進めている経済成長の原理は、どこまでもヨーロッパ近代が生み出した産業技術文明の原理によっている。今日の東アジアは、ヨーロッパ近代の原理をヨーロッパ以上に推し進めることによって、ヨーロッパ諸国を凌駕しようとしていることになる。とすれば、よく言われるように、「西洋文明は行き詰まった。これからは東洋文明の時代だ」という単純なスローガンは、必ずしも成り立たないであろう。この報告書の中では、それほど単純なスローガンが叫ばれているわけではないが、しかし、西洋文明の翳りを東洋文明の伝統の再生によって克服しうる方向を、かなりの報告者が示唆しているように見受けられる。しかし、ヨーロッパ近代文明の地球大的な拡大によってもたらされた多くの弊害は、どの文化圏でも、近代化すればするほど免れないのだから、それほど素朴に東洋文明の復権を主張することはできないであろう。

現代の課題

ヨーロッパ近代文明の世界化によって成立してきた現代の地球文明には、様々の問題が

内包されており、もしもそれを放置しておくなら、場合によっては、その漸進的自滅さえ予想される。南北問題もその一つである。近代化を果たした北の先進諸国と、まだその途上にある南の発展途上国との格差が、南と北の抗争・分裂をもたらし、現在成立しつつある地球文明を内部から解体していく危険性がないわけではない。この問題と関連して、人口問題も無視できない課題である。特に、発展途上国が抱えている過剰人口の問題をどのように解決していくかは、今日の地球文明にとっての最重要課題と言ってよい。もしも、この問題を解決できなかったなら、南から北への難民の流入が激しくなり、一種の民族移動が起きて、それが北の先進諸国の文明を食い潰していくことにもなりかねない。この人口問題とも連関して、盛んに叫ばれている地球環境問題も、人類が抱えている重要な問題である。産業技術文明の発展による地球環境の破壊は地球の生態系の破壊をもたらし、人類の生存さえ脅かしかねないと言われている。また、民族問題も重要課題である。東西冷戦の終結は東西の最終的対決を回避し、世界に平和をもたらすかにみえたが、逆に、米ソの支配力の低下とともに、多くの民族分裂や民族紛争が頻発している。これらの問題を放置しておくなら、世界は抗争と分裂を助長し、それが文明の没落をもたらす可能性さえある。

この人類が自ら築き上げてきた文明の挑戦に対して、何らかの創造的な応戦をしていくとすれば、様々の面での共生のシステムを作り上げていく以外にない。南と北との共生、自然と人間との共生、民族と民族の共生のシステムを作り上げ、多様な文明が共存する多元的文明世界を築き上げていかねばならない。多様性の中に統一があり、統一の中に多様性が保存されているような文明世界の構築が必要であろう。トインビーの文明多元論と世界国家論は、この多と一の統合をはかる上において重要な知恵であろう。神川氏も前掲論文で述べているように、今日の世界では、もはや、ある別の国家が覇権を握ることによって文明の交代が行なわれる時代ではなく、今日の地球文明そのものが自己変容して、新しい地球文明を作っていく以外にないのである。

トインビーは、そのような現代文明の危機を克服するのに、もはや西欧文明の原理によってしては不可能だと考えている。産業主義に裏付けられた西欧文明は、軍備拡張競争をもたらし、環境破壊をもたらし、南北の格差を増幅したとみる。西欧は活気づけ分裂させることはできるが、安定させることも統合することもできないという。かくて、トインビーは、西欧文明主導の時代はすでに終了し、これらの西欧文明がもたらした矛盾を解決するには、中国を中心とした東アジア主導の時代に入らねばならないと考え、中国を主軸と

した儒教文明圏に期待したのである。（『図説　歴史の研究』）

中国への期待

確かに、神川氏も語っているように、現代の地球文明が抱えている危機状況から、それを克服するために地球文明自身が自己変容を行ない、自己転換していくためには、中心文明から周辺文明へという方向ではなく、逆に、周辺文明から中心文明への変革が必要かもしれない。周辺文明は多様性に富んでいる。その多様性の中から、文明克服の糸口を見つけることも不可能ではないかもしれない。だからこそ、トインビーは、中国を中心とする東アジアの儒教文明圏に期待したのである。

トインビーの見るところによれば、中国には儒教に裏付けられた中道精神があり、それは安定性の原理になるという。安定社会は近代化には遅れるが、しかし、その遅れていることが逆に有利に働くと考える。また、中国にある集団主義的平等主義は、西欧文明がもたらした個人主義的不平等を克服しうるという。中国には広い国土があり、多くの人口を擁し、豊富な資源と文化的伝統があり、人々は勤勉で、かつ農業と工業のバランスがとれている。その中国が日本と協力したなら、アジアの安定がもたらされ、それは、将来の世界平和に貢献するであろう。西欧文明は、物質主義的で、軍国主義的で、環境破壊や人間性の崩壊をもたらした。現代の世界は、工業化がもたらしたこのような弊害を克服しなければならない時に来ている。トインビーは、この脱工業化の方向づけにおいて中国の精神的遺産が貢献するだろうと期待し、中国を米ソに代わる未来の国と評価したのである。

しかし、このようなトインビーの中国への期待は、今日までの中国を見る限りは、期待外れに終わっていると言わねばならない。トインビーは、中国社会に、伝統に基づく中道精神と安定性を見たけれども、少なくとも、コミュニズムは中道とは言えないし、国共内戦から中共の成立、文化大革命から開放政策へという社会の大きな変動は、およそ安定性というものからは縣け離れた社会の激変と言わねばならない。トインビーは、また、中国社会に集団主義的平等を見たけれども、その集団主義は全体主義的統制によるものであって、自由の圧殺の上に築かれたものである。平等においても、低い方への一律平均化にすぎず、実際には、指導する者とされる者の間の不平等は資本主義国以上に見られる。トインビーは、脱工業化の世界的潮流と中国の精神的伝統を結合したけれども、それに反して、中国自身は、文革から改革開放へと一貫して工業化を目指してきた。トインビーは、西側先進国は工業化によって環境破壊をもたらし、人間性の崩壊をもたらしたと言うが、今日

の中国自身、何より環境破壊と人間性崩壊の病に罹っているのが現実である。中国自身、共産主義によって、一貫して、先進国に追いつくための工業化政策をとってきたのである。従って、少なくとも現在の中国のシステムは脱工業化のモデルにはなりえないであろう。

考えてみれば、中国も、中華民国以来、近代化という名において、西洋化を一貫して追求してきた。従って、西洋文明に根差す物質主義と軍国主義の病理からは、中国自身も免れえなかったのである。中国も、アヘン戦争の敗北を機に、それ以来、絶えず西洋の近代文明を導入してきた。共産主義も、その遠い源泉を尋ねれば、十九世紀後半のヨーロッパが生み出した異端の思想であった。しかも、それは、非ヨーロッパに受け入れられると、どこでも、近代化の一方法という意味をもつようになり、形を変えた西洋化という意味をもつに至った。従って、共産中国も、軍事、農業、工業、教育、科学技術、あらゆる方向での近代化を目指している。とすれば、また、近代化・西洋化の悪弊も同時に入ってくるのであって、その弊害から局外者でいることはできない。

この報告書の中でも、中国の陳瑛氏は、「挑戦の試練と応戦の英知」という題で、トインビーが『歴史の研究』の中で扱っているこの問題を、中国文明に当てはめて考察している。そこで、中国の諺を引いて、「網戸を取り付けて、新鮮な空気を入れ、蠅や蚊が入って来るのを防ぐ」と言っているが、文明の流入においては、このようにはいかないのが現実である。一旦開放すれば、西側先進国の腐敗も、さらに政治的自由の要求も何もかもが入ってきて、その国の屋台骨を揺るがすことにもなる。中国を体とし、西洋を用にのみ限定することは、実際には不可能なのである。トインビーも、『歴史の研究』の中で、文明と文明の空間的接触について、「一つのことがもう一つのことを引き起こす」という法則を発見している。小林多加士氏も「東アジア文化圏のダイナミックス」という論文の中で引き合いに出している中国のテレビ・ドキュメンタリー『河殤』（黄河文明の傷み）では、中国が絶えず伝統文化の全面否定つまり全面的西欧化に向かうかと思えば、他方では、徹底的に保守的伝統主義に走ってしまう欠陥が指摘されているが、この悩みは十九世紀の清朝末期以来続いてきた中国の苦悩であった。今日の中国は、再び、その開放政策によって西側先進国文明を受け入れ、同時にその悪弊をも呑み込んでいるのが現状である。この面から言えば、現在までの中国は、トインビーの期待には応えていないと言わねばならない。

韓国・日本への期待

この地球文明の転換に、東洋の遺産、特に儒教精神に期待するとすれば、むしろ、その

精神が根強く残っている韓国に期待することができるかもしれない。現に、この報告書の中でも、「韓国とトインビー」と題した挨拶の中で、韓国の金起東氏は、未来の世界史が儒教文明圏によってリードされるであろうというトインビーの予測を紹介しながら、概略次のような趣旨を述べている。「今まで西欧文明主導のもとで無制限な工業化を推進した結果、自然環境が破壊され、人間疎外が起きた。今日、世界の合一化に向けての新しい人間像が求められている。その点では、儒教文化圏、特に韓国が、長い伝統の中で培ってきたヒューマニズム精神が貢献し得るであろう」と。また、同じく、李洋基氏も、「儒教文明圏の将来と韓国」という論文の中で、人間の非人間化を防ぎ、人間の尊厳と自由を回復するには、韓国の家族制度の中で守られてきた儒教倫理の評価が必要だという意味のことを述べている。また、神山四郎氏も、「トインビーの文明史から」という論文の中で、身分制社会の上に立てられた〈礼〉のモラルを身分差のない近代社会の中に実践できたら、欧米型の個人主義ヒューマニズムとは違ったヒューマニズムができるだろうと述べ、韓国の文明史的役割について期待を表明している。

しかし、韓国においても、現在、その急激な近代化の潮流の中で、むしろ、旧来の儒教精神が阻害要因になってきており、儒教精神も世代を追うごとに次第に説得力を失いつつある面は見逃せない。また、韓国の儒教にも問題がないわけではない。白道根氏も、「トインビーの中国観と韓国文明」という論文の中で、朝鮮における家族主義的原理としての〈仁〉の原理に偏りすぎた結果、社会中心的な〈義〉の原理がおろそかにされた点を指摘している。また、最近の韓国社会で問題になっていることだが、韓国の儒教には必ずしも勤勉を尊ぶ教えはなく、むしろ文によって立つことを尊び、額に汗して働くことを蔑む傾向にあり、それが韓国の発展の阻害要因になっているとも言われている。いずれにしても、経済発展という名において近代化を推進していこうとすれば、旧来の儒教精神を解体していかねばならない面もあり、韓国においても、儒教精神は次第に衰退しつつあると言わねばならない。

日本においても、確かに、明治近代国家の形成においては、江戸時代から培われてきた儒教の〈義〉の精神が貢献したが、その後、大正、昭和とかけ、特に第二次大戦後、復興経済から高度成長経済の結果、急激な経済発展による資本主義の爛熟とともに、そのような儒教精神は雲散霧消してしまったというのが現実である。

このように、東アジアの儒教文明圏においても、共産主義による近代化にしても、資本主義による近代化にしても、いずれにしても、儒教精神は急激に衰退していっているというのが実際であって、それほど安易に儒教の再生を主張することはできないであろう。儒教の再生には、多くの困難があると言わねばならない。なるほど、旧来の儒教倫理が経済発展に寄与している面もあるけれども、それとても、経済発展という名の欲望の増大が旧来の倫理を利用し、その手段に使っているだけなのかも知れず、本来の質実剛健の精神からは程遠いものがある。確かに、東洋には、大同、中道、和、自助、質素、知足などの精神がある。それらの精神が今なお健全に生きているのなら、あるいは、今日の地球文明の抱える問題を克服し、新しい文明を形成する営為において貢献しうるかもしれない。だが、それらの精神を培ってきた東洋自身が、ここ二〇〇年の間、時代を追うごとに、近代化という名において、そのような精神的遺産を失い、食い潰してきたのである。むしろ、そうすることによって、今日の東アジアは、経済発展を遂げてきているという面もある。

今日の東アジアも、人口問題や環境問題や民族問題など、多くの問題を抱えている。これらの問題は、ヨーロッパ近代文明が抱え込んだ問題であるが、それと同じ問題を、近代化の進展とともに、東アジアも増幅して抱え込んでいる。トインビーは、西欧文明は物質的繁栄にのみ固執し、精神的エネルギーを忘れたと批判しているが、しかし、これと同じことは、今日の東アジアについても言えるのであって、それほど単純に、西欧文明の限界を東アジア文明圏が克服しうるとは言えないであろう。

なるほど、中心文明の弊害を克服するには、その中心文明によって周辺文明化された文明圏の伝統的原理を一般化して、文明の転換をはかる以外にないかもしれない。しかし、それは、言葉で言うほど簡単なものではない。周辺文明が相変わらず中心文明の原理を推し進め、中心文明の弊害を拡大しているからである。従って、「西洋は行き詰まっている。東洋の精神によって克服しなければならない」というような単純なスローガンを、勝ち誇ったように叫ぶことはできないであろう。確かに、今日、東アジアの時代が到来しつつあるが、それは、徹底的に近代の原理を追求し、儒教など伝統的精神を犠牲にし、資源を浪費し、環境を破壊することによって、生産力を上げ、どこまでも効率を追求してきたからである。その経済力が、今、ヨーロッパをも凌ぐほどになってきたことに助けられて、その自信の下で、それを東洋の精神の勝利と主張したとすれば、そこには欺瞞があると言わねばならない。そのような叫びは、単なる経済的パフォーマンスのバブルのようなものにすぎないからである。そこからは、それほど創造的なものは生み出されないであろう。そ

れは、単に、経済的優位の表現にすぎない。

かつて、十九世紀に、ヨーロッパ自身が経済的軍事的優位を誇示していたときは、それはヨーロッパの合理精神の勝利とみられた。しかし、二十世紀になって、ヨーロッパの経済的軍事的優位が崩れると、逆に、ヨーロッパ精神への自信喪失の嘆きが、当のヨーロッパ人自身から聞かれるようになったのである。単なる経済や軍事の力の消長の反映として出ては消えていくスローガンは、それほど信用できるものではない。かつて、ロシアにおいて、十九世紀初め、ナポレオンが攻め込んで来たとき、ロシアはそれをどうにかして追い返すことができた。それができたのは、実際には、ピョートル以来の軍備の近代化・西洋化の成果と冬将軍の力によるところが大きかった。ところが、一旦ナポレオン軍に勝利を収めるや、ロシアでは、逆に、それをスラブ精神の優秀性の証と主張するスラブ伝統派が抬頭し、そのため、ロシアの近代化・西洋化を遅らせてしまうことになった。

ちょうどそれと同じように、今日の東洋文明再評価の動きが、単なる東アジアの経済力の反映にすぎなかったとすれば、それは全く皮相なものになってしまうであろう。今日の日本、韓国、中国、どれを見ても、トインビーが抱いた期待には必ずしも応えていない。日、韓、中とも西洋近代文明の弊害を超克してはおらず、むしろ、その弊害をそのまま呑み込んでしまっているのが現実の姿だからである。東アジア諸国も、近代化という名において、伝統的美風は失われ、環境は破壊され、人心は荒廃し、近代の同じ病を病んでいる。それほど簡単に、東アジアが現代文明の危機を克服しうると言うことはできないであろう。

東アジアにおける過去の遺制の再生を、それほど安易に語ることはできない。行き詰まった西洋文明を東洋文明によって克服し、新しい文明を創造しよう、という一見耳障りのよいスローガンには、吟味すべき多くの問題があると言わねばならない。東アジア自身、行き詰まった西洋文明の原理を自ら推し進めているとともに、自らの伝統から離脱してしまっているからである。

トインビーは、この巨大な技術文明の後に精神文明がやってくることを予感していた。確かに、このことはありうることであって、この現代の巨大な技術文明が衰退に向かい、人々の不安が増大していけば、宗教が興隆し、精神文明が創造されてくることはありうる。しかし、古代ローマのキリスト教でさえ、古代ローマの崩壊を救うことはできなかった。ただ、わずかにキリスト教だけが生き延びて、次のヨーロッパ文明およびビザンツ文明を作り上げるのに貢献しただけであった。それと同じように、二十一世紀になるか、二十二世紀になるかは分からないが、新しく興隆してくる宗教たりとも、この巨大な技術文明の

弊害を克服することはできないであろう。それは、単に、文明の衰退に伴う不安の表現にすぎないからである。もしかしたら、その宗教のできる役割は、この物質文明の衰退に対して引導を渡すことだけなのかもしれない。しかも、その新しい宗教が、儒教の再生によってもたらされるのか、あるいは仏教の再生によってなのか、あるいはヒンズー教の再生によってか、あるいはイスラム教なのか、あるいはキリスト教なのか、それとも全く新しい宗教が登場してくるのか、にわかに判断することはできないと言わねばならない。

（『比較文明』8号　刀水書房　一九九二年　所収）

多様性の中の共存

統合と分散

二十一世紀の初頭にあたる今日、世界史はどのような方向に動いていっているのであろうか。

二十世紀末の旧ソ連の崩壊と諸民族共和国の独立は、民族主義が共産主義という普遍主義を滅亡させた動きであった。第二次大戦後も、西洋の植民地支配からアジア・アフリカ諸国が次々に独立していったが、ちょうど、これと同じような動きであった。

とすれば、中国でも、遠からず、自由化の動きは起きてくるであろう。かつて、アヘン戦争で敗北した清朝は、洋務運動によって西洋の技術を導入しようとしたが、単なる技術の輸入に終わったために失敗、法体制や政治システムの改革を求める変法自彊運動が起きるが、これも頑迷な保守派廷臣のために失敗、そのため、清朝は滅亡の道を歩んだ。これに似たことは、今日の中国にも成り立つ。一九八九年の天安門事件は、経済の自由化のためには政治の自由化が必要だとする政治改革の要求であったが、変法自彊運動同様、失敗した。今日の中国政府は、政治的には一党独裁体制を堅持しながら、経済的には改革開放路線を推進、目覚ましい発展を遂げている。しかし、これも、ますます深まる貧富の格差や中央・地方の格差など、多くの矛盾をかかえているから、かつての中体西用路線と同様、いつか破綻するであろう。かくて、中国の一党独裁体制が崩壊すれば、今度は、チベットやウイグルや内モンゴルなどの民族自治区の自決運動が抬頭、中国という地球上に最後に残った植民地帝国は崩壊していくであろう。台湾も独立するであろう。ここでも、民族主義が、共産主義という普遍主義を滅ぼしていくことになる。

旧ソ連の崩壊による各民族共和国の独立にしても、あるいは、ロシア共和国内における各民族共和国の独立の可能性にしても、中国からの各民族自治区の独立の可能性にしても、どれも、共産主義と自由主義というヨーロッパ近代が生み出した二つの普遍主義の対立が解消し、各国とも、両者の対立にもはや束縛されなくなったことから起きている。第一次大戦後にしても、第二次大戦後にしても、冷戦終結後にしても、大国同志の大きな戦いが終わった後には、その大国によって支配されたり、分断されたり、その戦いの狭間で息を潜めていた小民族が胎動し、自己主張してくる。

さらに、二十一世紀は、アメリカの一極支配に対するイスラム過激派勢力からの反抗が、世界史の動向を左右する重要な問題として登場してくる。もちろん、イスラム勢力も多様だから、これを、必ずしも〈文明の衝突〉と断定することはできない。イスラム勢力も、近代化路線を取る勢力から反近代化路線を取る勢力まで様々であり、一枚岩ではない。イスラム諸国家が、一丸となって、欧米キリスト教諸国と戦っているわけではないのである。しかし、イスラム過激派からの例えばテロリズムによる反抗は、アメリカが推し進めるグローバリズムに対する反抗であることは確かである。この反グローバリズムの動きをみても、世界は分散の方向に向かっていると言える。

世界史の各時代には、一般に〈統合の時代〉と〈分散の時代〉がある。今日の世界中で演じられている民族主義の復活や原理主義の動きは、〈分散の時代〉の特徴だともみることができる。自由主義圏における各国の自己主張の動きにしても、アメリカの人種問題による国内の分裂傾向でさえ、〈分散の時代〉という観点からみることもできるであろう。

ところが、他方では、今日の世界史には、分散の方向ばかりでなく、統合に向かう傾向も同時に見られる。例えば、ＥＵの動きは、アジアやアメリカに対抗していくために、それまでの国民国家の枠のみに閉じ籠っていたのでは間に合わず、経済統合から政治統合へと、自己強化していこうとする動きである。また、アメリカも、北アメリカ地域と南アメリカ地域を再統合し、域内貿易圏を構築しようとしている。さらに、アメリカは、第一次大戦、第二次大戦、冷戦と続いた二十世紀の国際対立を勝ち残ってきた唯一の国家として、二十一世紀の世界の一極支配を志している。また、アジア地域も、ＥＵほどではないにしても、事実上密接な経済圏を形成しつつあり、世界史の無視できない重心となっている。とすれば、二十一世紀の世界を展望するとき、何らかの形での世界の統合の方向も見えてくるであろう。

世界史の現在は、分散と統合、特殊主義と普遍主義のせめぎあいの中にあると言える。旧ユーゴスラビアのように、あまりにも分散と分裂、つまり特殊主義の極端に走っても、世界は成り立たないし、人民も生きてはいけない。しかし、十九世紀のヨーロッパ列強による植民地支配や、二十世紀の旧ソ連による各民族支配のように、極端な普遍主義をかざした支配と統合によっても、世界は立ち行かない。二十一世紀の初頭、アメリカが画している世界の軍事的・政治的一極支配も、成功するようには思われない。被支配民族の抵抗や反グローバリズムの反抗を受けて、紛争や戦争はやまないであろう。もしも、二十一世紀の世界に、各民族・各勢力の共存が必要だとすれば、極端な特殊主義による孤立でもな

く、極端な普遍主義による支配でもなく、その両者の調和と均衡をとった〈多様性の中の共存〉の道を探り、その多様性の中を生き抜く方法を工夫していく以外にない。

自由主義や共産主義は、ヨーロッパの近代、特に十九世紀のヨーロッパがつくりだした普遍主義の思想である。二十世紀には、これらが世界的に拡散、世界を二分してきた。しかし、二十一世紀初頭の現在、少なくとも共産主義は破綻。自由主義も、民族主義や原理主義の抵抗に面している。現代は、多様な価値観をもった諸民族・諸国家が乱舞する多様性の時代である。とすれば、われわれは、多様な価値を互いに尊重し、〈多様性の中の共存〉という哲学をもって、この多元主義的時代を生きていかねばならないであろう。

注目されるアジア地域

ところで、この〈多様性の中の共存〉という理念を、二十一世紀の地球文明をリードする理念として提唱することのできる地域は、特にアジア地域であろう。アジア地域は、多様な宗教的・文化的背景を温存させながら、同時に、経済的・政治的・社会的に、その相互依存度をより高め、かくて、二十一世紀の地球文明の重心として重要な地位を占めつつある。このような地域からこそ、新しい理念は生み出されてくる。

だが、そのためには、そのような展望がもてるようになった東アジア諸国の今日までの歴史的過程を振り返っておく必要がある。よく知られているように、十九世紀初め以来、あるいはそれ以前から、アジア諸国は、ヨーロッパ諸国の圧倒的な力に従属せざるをえなかった。それ以来、アジア諸国にとって、近代化は、西洋化という形をとって、諸国民の大きな課題となった。アジア諸国は、ヨーロッパ列強によって植民地化されたところがほとんどであるが、そこでは、この近代化の動きは、ヨーロッパの植民地からの独立を目指すことと一つになっていた。他方、日本やタイなど植民地化されなかった少数のアジア諸国も、ヨーロッパから押し寄せてきた新しい文明に対して、それを受け入れ、自主的に西洋近代化をしていくことによって、ヨーロッパの植民地になることを免れた。どちらの方向を取るにしても、西洋近代化は、至上命令となった。それは避けることのできない運命でもあった。

だが、この時以来、われわれは、近代化と伝統の相剋に悩まねばならなくなった。近代化してヨーロッパからの自立をはかり、ヨーロッパと対等に伍していこうとすれば、どうしても旧来の伝統社会を壊す必要があったし、壊していけば、自己のアイデンティティを失ってしまうという危機に面したのである。西洋近代化を至上命令とした為政者や知識人

は、旧来の伝統文化の遅れていることを強調し、そこからの脱却を説いた。他方、伝統を重視し、国民のアイデンティティを強調した伝統派は、西洋近代化を、自分たちの社会の存立基盤を奪う危険性があるものとして排撃しようとした。

このような東アジアにおける同化と反発の文化葛藤の結果は、多くの場合、自分達のそれぞれの伝統を維持すると同時に、堅固な近代国家を建設することに向けられてきたと言えるであろう。ヨーロッパ近代文明との出会いにおいて、多くの努力を積み重ねながら、ヨーロッパ近代文明を受け入れると同時に、みずからのアイデンティティをなお保持し続けてきたという点は、大多数のアジア諸国にとっての共通した経験となった。だからこそ、われわれは、また、多様な価値を併存させる基盤をもつことができるようになったのである。〈多様性の中の共存〉という理念も、このような基盤から出てくる。

かくて、二十一世紀初頭のアジアの状況をみれば、長い苦闘ではあったが、アジア諸国は、近代化と伝統のバランスをはかり、それぞれの国がそれぞれの工夫をし努力してきたために、少なくとも、第二次大戦後、ヨーロッパからの自立を達成しえた。そのことによって、十九世紀以来、二百年あまり支配的であったヨーロッパ中心の世界秩序を打破することができた。この延長上に、今日のアジアの経済発展もあり、二十一世紀の新しい世界秩序への展望ももつことができるようになったのである。

日本の場合

日本の近代史を振り返ってみても、それを根本的に規定したものは、ヨーロッパ近代文明の怒濤のような襲来であった。このとき、日本も、ヨーロッパ近代文明への同化と反発の相異なる反応を同時に示した。しかし、日本は、概して言えば、比較的巧妙に伝統と近代のバランスをとって近代化を果たしてきたと言ってよいであろう。日本は、このとき、〈和魂洋才〉をスローガンとした。この事実からも分かるように、日本は、伝統的精神の根幹は残しながら、同時に近代ヨーロッパ化を急速に進めていくというしかたで、相反するものの両立をはかってきた。日本は、古代の文明成立以来、絶えず外来文明を貪欲に受容し、宗教的にも、文化的にも、多様な価値を併存させてきた。ヨーロッパ近代文明の受容の努力も、その一環であった。

現に、この近代ヨーロッパ化を進める過程で、その初期に指導的役割を果たしたエリート達は、江戸時代末期の封建社会で育った下級武士達が中心であった。しかも、彼らには、儒教的教養の背景があり、それが日本の西洋化・近代化に貢献することになった。儒教的

精神は、何よりも人の上に立つ者の倫理を説き、全体のための奉仕を骨格としていたからである。

また、日本人が培ってきた労働神聖観は、すでに江戸時代から、近代資本主義の育成に寄与し、明治以後の近代産業社会の形成にも寄与した。江戸以来培われてきた日本人の労働観が、武士階級出身のエリート達の洞察力と合体し、軽工業から重工業へと進んでいった近代産業の発展に貢献したのである。明治以後の日本の近代ヨーロッパ化には、江戸時代の遺産があった。社会的伝統が、むしろ、近代化に貢献していたのである。

今日の高度に発展した超近代社会としての日本にも、なお、その基礎には、かつての伝統社会の文化が変容されて存在している。例えば、実際には一九六〇年代以後に形成されてきた日本的経営は、西洋の契約社会で育った近代産業文明を、人間関係を重んずる非契約社会の文化によって変容し、全体の合意と労働意欲を引き出すのに成功した。こまやかな人間関係を重んじ、柔軟に調整していく能力は、むしろ、日本の伝統的社会において培われたものであった。確かに、日本は、近代百数十年の間、西洋を模倣し、それに追いつき追い越すことを目標としてきた。しかし、実際には、絶えず西洋の近代文明を自らの伝統の中に変容しながら、近代化と伝統を両立させつつ進んできた。日本は、近代化と伝統のバランスをとりながら、多様な価値を共存させてきたのである。このような文化的土壌から、〈多様性の中の共存〉という理念は生まれてくる。

地球文明の理念

二十一世紀の文明変動は、多くの分散の傾向と同時に、ヨーロッパ圏、アメリカ圏、アジア圏を軸としながら、世界の統合化に向かってもいる。

特に、アジアに注目するなら、われわれは、少なくとも、南北格差の是正に成功しつつあるようにみえる。経済的にも、垂直分業から水平分業に転じ、南北が相乗的に繁栄していく可能性が見えてきた。中国や韓国、東南アジアや南アジアの経済発展は、それを示している。このアジアの緊密化をもたらしたものは、科学技術の発達と経済の発展である。しかし、この発展がアジア圏の緊密化をもたらせばもたらすほど、われわれは、逆に文化的には互いの違いを意識しつつある。技術や経済においては統合の方向へ向かい、文化的には多様性の方向を確認しつつある。だが、だからこそ、われわれは、このような状況に、〈多様性の中の共存〉という理念を見出すことができるのである。それは、すでにヨーロッパ対非ヨーロッパの対立でもなく、もちろん、東西イデオロギーの対立の場でもなく、

もはや南北対立の場でさえない。アジア地域は、〈多様性の中の共存〉の構造のもとに、それらの対立を克服する場となりうる。

確かに、アジアは、言語・宗教・文化・政治体制・近代化の度合いにおいて、多様である。しかし、この多様性は障害ではなく、むしろ、歓迎すべきものと考えねばならない。われわれは、それぞれの文化的伝統を保持した共存を目指すべきだからである。伝統は様々であるが、そこには、また、共通の理念も存在する。文化的多元主義を基礎にした国家建設や技術の開発は不可能ではない。〈多様性の中の共存〉つまり〈多の中の一〉〈一の中の多〉これが、アジアの時代をリードする理念である。と同時に、これは、二十一世紀の地球文明の理念ともなるであろう。今日の地球上には、多くの国々がそれぞれの独自の文化をもちながら、同時に相互依存度をより高めていく国際社会が形成されつつある。このような社会においてこそ、〈多様性の中の共存〉の哲学は生まれ出てくる。ヨーロッパとアジアの長い文化葛藤の結果、アジアは、このような理念を発信する資格を得たと言ってよいであろう。

しかも、この〈多様性の中の共存〉という思想は、仏教や儒教の中にも、イスラム教やキリスト教の中にもあった思想である。この伝統的宗教の中にあった思想が、今日の自由民主主義の思想の中に生かされるなら、この理念は、二十一世紀の地球文明の指導理念となりうる。

例えば、アジアを中心にかなり広範囲に普及し、長い伝統をもった仏教の教えにも、「この宇宙に存在するすべてのものには仏性があり、万物がそれぞれに尊い輝きをもった存在である」という考えがあった。すべて生きとし生けるものは、無上の悟りを得る本性において、平等であり、一つである。と同時に、それは、多種多様な万物の中に宿る。真理は、一であって多であり、多であって一である。このような仏教の伝統的な思想からも、われわれは、〈多様性の中の共存〉という思想を取り出してくることができる。あるいは、そのような思想を理解するコードが、この伝統思想の中にはある。二十一世紀の地球文明は、多種多様な価値をもった諸国家がそれぞれに平等な価値をもち、互いが互いを尊重し合って、生存していかねばならない文明世界である。仏教的伝統からも、このことは理解することができる。

同様のことは、儒教的伝統からも理解することができるであろう。例えば、儒教の仁や礼の思想は、特に人間関係において、他を思いやり、他を尊重し合って、共同社会を立派に成り立たせていこうとする思想である。したがって、これを、国家の枠を超えて、地球

上の諸国家によってつくられる国際社会まで広げることができるなら、儒教的伝統も、〈多様性の中の共存〉の理念を構築していく上において、貢献するところがある。孫文の三民主義の思想は、近代の国民国家樹立のための近代的理念であったが、ここにも儒教思想は脈々と生き続けていた。特に、この三民主義の中にあった大同精神を、単なる国民国家の枠を超えて、地球文明全体に及ぼすなら、多種多様な諸国家の共存を可能にする思想ともなりうるであろう。少なくとも、そのような〈多様性の中の共存〉の理念を理解しうるコードを、儒教や三民主義の思想はもっていると言わねばならない。

アジアの諸文明は、また、仏教や儒教によって成立した文明ばかりではない。東南アジアのイスラムの伝統も忘れてはならない。イスラムは、中東諸国をはじめ、中央アジア、アフリカなど広範に分布している有力な宗教でもある。このイスラムの教えも、しばしば誤解されがちではあるが、本来は、〈多様性の中の共存〉を可能にする教えであった。イスラム社会は、イスラム以外の他の宗教の信者をも包含する多層社会であり、原則上、他の宗教の信者に改宗を強制しないし、宣教もしない。したがって、イスラムには、少数の例外を除いて、原則的には、宣教師や布教師、さらに聖職者が存在しない。実際、コーランの中でも、信仰の問題に関しては、その強制を厳しく禁止している。（第二章二五六節）イスラム社会は、通常の誤解に反して、多種多様な価値や信仰をもった人達が共存できる社会なのである。だから、ここからも〈多様性の中の共存〉の思想は、容易に導出される。

例えば、それは、インドネシアの建国の理念、パンチャ・シラ（五原則）にも表現されている。この五原則は、民族主義、国際主義、民主主義、社会福祉、神への信仰を謳ったものである。この五原則の中で、最も中心的な原理である〈神への信仰〉という原理は、イスラムの神（アラー）への信仰のみを意味せず、他の神、キリスト教やヒンズー教の神への信仰もすべてを含む。したがって、この原理は、信教の自由を保証するものである。そのような寛容な思想のもとに、排外主義を排し、国際的友愛を強調し、民族主義と国際主義の調和を理想とし、代議政治の原則を示し、経済的平等を理想としたのが、五原則であった。このパンチャ・シラを貫いている思想こそ、〈多様性の中の共存〉の思想であり、これは、アジアの近代社会を生きてきたイスラム思想の一つの成果でもあった。この〈多様性の中の共存〉の思想を、もしも、多民族多言語社会であるインドネシア社会の統合の原理にのみとどめず、地球文明全体にまで広げるなら、多様な諸国家の共存を可能にする世界哲学ともなりうるであろう。

アジアにも根強く普及し、欧米ばかりでなく、世界に広く分布しているキリスト教思想にも、よく知られているように、「万人は神の前において平等である」という思想がある。また、十七世紀後半以降は、西欧キリスト教社会においても、信教の自由は保証されたのだから、ここからも、われわれは、〈多様性の中の共存〉の思想を取り出してくることができる。キリスト教では、人間一人一人が神の似姿としてつくられ、一人一人が神につながると考えられてきた。神の前の平等の思想もここからくる。もしも、この思想を、個人レベルでなく、広く、民族間、人種間、国家間にまで及ぼすなら、〈多様性の中の共存〉という地球文明の理念にも通じていくであろう。

この西欧のキリスト教に裏付けられた近代民主主義の原理も、本来は、次のような諸原則によって成り立っていた。互いの人格における人間性を尊重する〈人間の尊厳〉、信教・思想・信条・言論・出版・集会・結社などの〈表現の自由〉、個性・能力の差異にもかかわらず人格においては差別されないという〈人格の平等〉、主義主張の違いにもかかわらず互いに他の立場を尊重する〈寛容の精神〉、私的な利害を超えて社会の共通利益を重んずる〈公共の福祉〉などである。このような共同社会を立派に成り立たせるための近代民主主義の倫理観も、地球全体の人類社会にまで広げるなら、多様な価値をもった諸国家の共存を可能にする思想になりうるであろう。

危機の克服

確かに、二十一世紀初頭の国際社会の現実を直視するなら、世界の各地域で、宗教や言語、思想や信条の違いからくる民族紛争やテロリズムが絶えることなく続いている。さらに、それらを制圧しようとして、報復戦争が行なわれている。このような民族紛争やテロリズムや報復戦争は、現実には収まることはないであろう。それどころか、二十一世紀は、民族紛争をはじめ、南北経済格差、人口爆発、環境破壊などに起因する難民の流出が激しくなり、一種の民族移動が起きて、二十一世紀は〈難民の世紀〉となるかもしれない。かくて、二十一世紀の地球文明は、〈多様性の中の共存〉どころか、各民族が入り乱れ、混入し合い、人種問題をはじめ、宗教や言語に根差す不寛容な紛糾を起こしかねない。二十一世紀の地球文明に、必ずしも明るい未来が約束されているわけではない。

だが、それゆえにこそ、これら、二十一世紀の地球文明が抱える様々の危機を克服していくためには、様々の面での共存のシステムを作り上げていく以外にない。南と北との共存、民族と民族の共存、グローバリズムと反グローバリズムの共存、自然と人間との共存

のシステムを作り上げ、多様な民族や勢力が共存しうる多元的文明世界を築き上げていかねばならない。〈多様性の中の共存〉の哲学は、このシステム構築のための重要な知恵となるであろう。

確かに、今日の文明社会では、特に先進諸国に見られるように、近代化が進めば進むほど、文明は爛熟し、人心は荒廃し、拝金主義が蔓延して、伝統的な宗教も形骸化し、社会倫理も混乱して、〈豊さの中の精神的貧困〉という文明病がはびこっている。欧米や日本はもちろん、経済発展が続いているアジア諸国でも、すでに、このような文明病が忍び寄ってきている。このことを考えるなら、伝統的宗教や倫理の再生を短絡的に叫び、それですべてが解決されるとは必ずしも言うことはできない。また、伝統的宗教や倫理がまだ根強く残り、共同社会維持の原理となっている発展途上国の方は、逆に、経済的貧困や飢餓、環境破壊や人口爆発、疫病の流行など、様々の難問を抱えている。この格差を是正することは、言葉で言うほど容易ではない。したがって、〈多様性の中の共存〉という理念は、どこまでも当為にとどまる。あるいは、それは、ほとんど祈りに近いものだと言うべきであろう。

しかし、それでもなお、そのような理念を掲げ続け、それを、何らかの形で、二十一世紀の地球文明の政治的・社会的・経済的システムづくりに具体化し、その理念を実現する努力をすることは、意義のないことではないであろう。

参考文献

小野川秀美編『孫文・毛沢東』（世界の名著64）　中央公論社　一九七四年

井筒俊彦『イスラーム文化』　岩波書店　一九八一年

藤本勝次編『コーラン』（世界の名著15）　中央公論社　一九七〇年

アリフィン・ベイ『インドネシアの心』　文遊社　一九八三年

拙著『欲望の体制―現代文明の行方』　南窓社　一九八五年

拙著『20世紀を読む』　泰流社　一九八九年

拙著『不安な時代、そして文明の衰退』　日本放送出版協会　二〇〇一年

（『文明間の対話に向けて』　世界思想社　二〇〇三年　所収）